

英国・北欧図書館研修報告

－大学図書館，病院・患者図書室より－

しばた ゆきこ
柴田由紀子

(理工学メディアセンター主任)

1 はじめに

2016年10月末から2017年1月末までの約3ヶ月、海外研修の機会をいただいた。筆者は英国セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館を拠点にした、2012年から開始された研修の5人目の派遣者である。今回の研修の目的は、まず英国内の日本語資料を所蔵する図書館の現状を把握し海外の日本研究図書館が抱える問題と要望を知ること、次に、欧州の大学図書館のサービス、特にコレクション・マネジメントや情報リテラシー教育について知見を広める、という2点を中心に据えた。それに加え、筆者は、医学情報を扱う信濃町メディアセンターで1996年から2009年の13年間の勤務経験から、教育制度、医療制度ともに日本とは大きく異なる欧州の大学図書館、病院図書室に興味があり、現地の司書の方々から紹介していただき、スウェーデン、デンマークの大学図書館、病院図書室等を訪問するという大変貴重な経験をすることもできた。研修・訪問先と詳細日程は、表1のとおりである。本稿では英国、

スウェーデン、デンマークで訪問した大学図書館の、特に関心を持った点、およびスウェーデンの病院図書室、医学図書館とそのサービスについて報告する。

2 訪問した大学図書館でのトピック

(1) コレクション・マネジメント

a 教科書の充実

英国、スウェーデン、デンマークいずれも図書館のコレクションの大きな部分を占めているのは教科書である。スウェーデン、デンマークは大学は国立で基本的に学費が無料、英国もほとんどの大学が国立で第一次世界大戦後から1998年までは学費は無料であった。また授業で指定される図書もかなりの量があり、学生は図書館の資料を利用するのが当たり前になっていると思われる。ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (School of Oriental and African Studies, 以下「SOAS」とする) の図書館では10人の受講者に1冊の割合で教科書を揃える等どの大学でも教科書は複本を多く所蔵している。

冊子だけでなく電子資料も活用されている。英国ではほとんどの高等教育機関が著作権の集中管理団体であるCopyright License Agencyと包括契約を結び、そこへ登録された資料は個別の許諾処理をせずに電子化が可能である。リーズ大学では教科書で電子化が可能なのは、図書館のシステム担当がインハウスで電子化して学内のWebサイトに載せている。

b 蔵書分析ツールの利用

今回訪問した中では、2箇所蔵書分析ツールの利用が計画されていた。

SOASでは、COPAC Collections Management (以下「CCM」とする) toolsを利用する計画があり、それに向けた目録担当者の特任言語担当のサブジェクトライブラリアンとのミーティングに同席させていただいた。SOASの図書館は英国におけるアジア・

表1 研修・訪問先詳細日程

下記以外の期間	セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館
2016/11/14~15	大英図書館
2016/11/21	ケンブリッジ大学
2016/11/28~12/2	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS)
2016/12/5~9	オックスフォード大学
2016/12/19	リーズ大学
2016/12/20	シェフィールド大学
2017/1/12	ストックホルム大学
2017/1/13	ウプサラ大学 (医学図書館ほか)
2017/1/16	リンネ大学 (カルマルキャンパス)
2017/1/17	リンネ大学 (ヴェクショーキャンパス)
2017/1/18	ユンビ、ヴェクショー病院図書室
2017/1/19	マルメ患者図書室
2017/1/20	コペンハーゲン大学社会科学部図書館

アフリカ圏の地域研究については中央図書館的役割を果たしており、特殊言語の資料を非常に多く所蔵している。CCM toolsを利用するには、英国大学図書館の総合目録であるCOPACに目録データが収録されている必要がある。しかし未整理の資料や、COPACへの自動アップロードが上手く行かないものなど、解決しなくてはならない課題があるとのことであった。

もう一つはWhite Rose Librariesと称されるシェフィールド、リーズ、ヨークの比較的近い距離にある3大学で、英国では初めてOCLCのGreenGlassという蔵書分析ツールを使い、重複状況の確認やそれぞれの蔵書の構成を分析し、Shared Printを進める計画が進行中であった。分析結果は予想をかなり下回る重複率だったため、筆者の訪問時にはその原因を調査中であり、おそらく書誌の出処が様々のため、書誌記述の違いにより同一図書が別の図書と認識されているのではないかと分析していた。

どちらも他館との重複や、自館の蔵書の強みを数値として明確にすることで、除籍やShared Printなど、コレクション・マネジメントを効率よく行うことを目指している点で非常に興味深い。ただし、これらのツールの利用には、書誌データの標準化を初めとして解決すべき問題も多いと感じた。

Jisc（英国情報システム合同委員会）では、2016年5月にCCM toolsを使ったコレクション・マネジメントに関する委員会Jisc Collection Management Community Advisory Boardが設置されたほか、COPACの機能の拡張を目指した“National Bibliographic Knowledgebase”の開発に着手しており、英国でのコレクション・マネジメントについての今後の動向を見守りたい。¹⁾

c スウェーデン、デンマークの大学図書館での選書

今回訪問したストックホルム大学、リンネ大学、コペンハーゲン大学社会科学部図書館では、基本的に蔵書の大部分が教科書であり、利用者からの購入希望を受け入れる以外、図書館独自の選書をほとんど行っていない。中でもストックホルム大学やコペンハーゲン大学社会科学部図書館は、教科書のコーナー以外に配架する図書が少ないという理由で、数年前からは分類ごとの配架をやめ、年度ごとに受け入れ順に配架しているという徹底ぶりである。なおスウェーデンの納本制度では、国内で発行された書

籍が国立大学図書館に納本されるが、全ての大学図書館に保存の義務があるわけではなく、ストックホルム大学では文学のみ受け入れていた。電子書籍である程度は利用できるものがあるという状況を脇に置いて、大学図書館で冊子の図書を積極的に購入していないところがあったことは、今回の研修の中で最も驚いた点の一つである。

d 目録作業

大英図書館、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学で目録作業を見せていただいた。各館独自に入力内容チェックのアプリケーション、Webマニュアルを整備する、などの目録の質を保つ努力がされていた。しかし日本語をはじめとする特殊言語資料は滞貨となりがちなのはいずれも同じようである。なお大英図書館では目録担当者がモニターを2台使い、ペン型スキャナを利用して入力するなど、機器面からも効率化を図る工夫がされ、まさに滞貨処理のプロジェクトも動き始めていたところだった。

(2) 学習支援、研究支援

どの図書館にもリエゾンライブラリアン、サブジェクトライブラリアンと呼ばれるスタッフがおり、学部との連携を密接に保っている。

リーズ大学では、学習支援、研究支援を総合してSkills@Libraryと呼ぶサービスを展開している。ウェブサイト上で様々な教育用のコンテンツを公開しているほか、論文執筆から数学まで、バラエティに富んだワークショップが用意されている。もちろん1対1のセッションも可能で予約もできる。これら大変充実したコンテンツの作成、およびワークショップ等を行なっているスタッフの能力の高さに驚かされた。

スウェーデンのリンネ大学ヴェクショーキャンパスの図書館には、論文の執筆やスタディ・スキルに関するサポートとしてAcademic Support Centreがある。ここのスタッフは図書館の職員ではないが、図書館との密接な協力関係のもとに活動している。この他にリンネ大学ではChatによるレファレンスサービスも行われているなど、きめ細かな学習支援が目をつけた。

オックスフォード大学の日本研究図書館訪問時には、日本から留学中の研究者への1対1のセッションに同席させてもらう幸運に恵まれた。研究者から研究分野やキーワードを聞き、直接やりとりしながら

ら研究者に合わせた資料の検索やデータベースの紹介を行うもので、新しい研究者がくると一人一人に同様のセッションを行なうとのことである。

図書館が学部や研究者との密接な繋がりによって、より充実したサービス展開に繋げる、またセミナーや情報リテラシープログラムをより有効に機能させることができていると感じた。

(3) 「場」としての図書館

今回訪問した図書館の多くが、「場」としての図書館をいかに提供するかに力を入れており、学習場所の提供、グループ学習室やライブラリー・コモンズに対する優先順位が高かった。

シェフィールド大学には、蔵書中心のWestern Bank Libraryの他に、基本図書はもちろん、シャワー施設も備える24時間開館のInformation Commons、2015年に開館した、同じく24時間開館で、教科書コーナーや豊富な学習スペース、グループ学習室のあるThe Diamond (図1) と呼ばれるそれぞれ独立した建物がある。

リーズ大学でも学部生用図書館とライブラリー・コモンズを兼ねたLaidlaw Library (図2) が2015年に開館し、前述のSkills@Libraryの窓口もLaidlaw Library内にある。



図1 The Diamond



図2 リーズ大学 Laidlaw Library

スウェーデン、デンマークの大学図書館では、さらに学習スペースへの優先度が高く、訪問先の大学図書館ほぼ全てで書架を減らしその場所を学習スペースに充てるということが行われていた。内装や家具のデザインも目を引くものがあり、特にコペンハーゲン大学社会科学部図書館にはさすが北欧デザイン、と感心するような部屋が複数用意されていた(図3)。



図3 コペンハーゲン大学社会科学部図書館

3 スウェーデンの医学図書館、病院・患者図書室

(1) ウプサラ大学医学図書館, Biomedical Centre Library, 患者図書室

ウプサラ大学では、病院内にある医師、学生向けの医学図書館と病院から徒歩20分程度のBiomedical Centre (以下「BMC」とする) Library, および病棟にある患者向けの図書室を見学した(図4)。

病院内の医学図書館は小規模で、閲覧席やグループ学習室が中心である。数は少ないが、スウェーデン語を中心に新刊雑誌も置かれていた。BMCでは医学部の授業が行われており、学習図書館の色合いが濃く、蔵書は教科書が中心である。雑誌はいずれの図書館も電子版が主となっている。

精神科病棟の2階にある患者図書室は大学の組織ではなく、公共図書館の分館である。開放的な空間に、小説なども揃えられ、病室を出られない患者にはブックワゴンで出張サービスを行なっている。



図4 ウプサラ患者図書室



図5 ヴェクショー病院図書室

(2) Kalmar County Council (リンネ大学カルマルキャンパス図書館内)

Kalmar County Councilは2015年よりリンネ大学と契約して医療スタッフへの医療情報サービス提供を開始した。担当職員3名は大学職員ではなくCounty Councilの職員であるが、リンネ大学図書館の業務を兼務している。サービス対象は3病院と、プライマリケアを担う29のヘルスセンターで、以前は病院内に図書室があったが、それを解消し、リンネ大学内で活動する形になった。患者への医療情報提供は行わず、それについては国が整備している医療情報Webサイト(1177.se)²⁾の利用を促す、或いは直接担当医師から提供してもらうとのことで、他の病院・患者図書室とは異なっている。

(3) ユンビ、ヴェクショー病院図書室

クロノベリ県のユンビとヴェクショーにある公立病院の図書室は、病院スタッフ対象の病院図書室機能と患者図書室を兼ねており、組織は病院の研究部門に属している(図5)。両病院は同じ自治体の病院で、図書室のスタッフの行き来がある。

ヴェクショーは図書室のスペース縮小のため除籍作業中で、闘病記や小説を除く一般図書を除籍していた。スウェーデンでは読書療法が日本よりも一般的なようで、患者図書室では小説は重要な役割を持っている。図書館員が選んだ図書や遊具などを何点かセットにして袋に入れ、その袋ごと科に貸し出すというサービスも行われている。

(4) マルメ患者図書室(スコーネ大学病院内)³⁾

マルメ患者図書室(図6)は、CRC(Clinical Research Centre)の建物内にある。図書館員、看護師、患者サービスのスタッフなど、職種の違うスタッフで運営されている。図書、AV資料を入院、外来患者に提供し、館外貸し出しも行っている。スタッフに看護師がいることで、電話やメールでの相談や、患者対象のセミナーも行なっており、大変充実したサービスを提供している。小児病棟、精神病棟、図書室に來られない患者の病室へのブックワゴンサービス、図書館員が選んだ図書等のセットの貸し出しサービスもある。別の建物に書庫があり、ブックワゴンの準備等はそこで行われている。慶應義塾大学病院の健康情報ひろばが病院の待合いにあることを伝えると、本当は病棟にあるほうがいいとスタッフの方はおっしゃっていた。なお、同じフロアに医学部の図書館もある。冊子体の資料は少なく、閲覧、学習スペース中心の図書館であった。



図6 マルメ患者図書室

スウェーデンの医療は地方分権で自治体ごとに管理されており、病院はほとんどが公立で、スコネ大学やウプサラの大学病院などの拠点病院は非常に規模が大きく、日本の病院のように1棟に複数の科が入っているのではなく、広大な敷地に内科、外科など科ごとの建物が建っている。この大きさにも圧倒された。ウプサラ大学病院の患者図書室が公立図書館であるように、病院ボランティアや個人の図書館員の努力などで維持されるのではなく、公的サービスの一つとして病院図書室がしっかりと病院内に根を張っている様子が体感できた。

4 セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館での研修

約3ヶ月の受け入れ先であるリサ・セインズベリー図書館(図7)では日本関係資料の整理業務、書庫の狭隘化対策として資料の移動や除籍作業を行った。リサ・セインズベリー図書館は、日本美術及び考古学に関する専門図書館で、丁寧に選定された蔵書で成り立っているのが印象的であった。筆者は通常受け入れる資料の他に、元駐日大使サー・ヒュー・コータツツィ夫妻より寄贈された1900年前後に出版された、日本、アジア関連の洋書を中心に目録作業を行なった。貴重なコレクションを大聖堂の鐘の音を聴きながら整理するという、贅沢な時間を過ごすことができた。



図7 リサ・セインズベリー図書館

5 日本語資料を所蔵する海外の図書館の課題

英国の日本語資料を扱う図書館の担当者の集まりであるJapan Library Group(以下「JLG」とする)のミーティングへの参加や、日本語資料を扱う各図

書館への訪問で見えてきたのは、まず、日本語資料を専門に扱う司書の減少である。定年退職後に補充がなく、中国語担当司書が兼任する状況もある。次に予算の不足である。昨年は円高もあってさらに厳しく、シェフィールド大学、リーズ大学などは新しい資料は購入できていないという。ケンブリッジ大学では人件費の削減により職員を減らさなければならぬという状況もあった。また、目録作業に関しては、目録規則や読みの違いによる修正作業、件名の付与、NACSIS-CATと自館の目録への二重登録作業などの負担がある。NACSIS-CATに一括登録したいという要望も聞かれた。そして最も期待されているのが日本語資料のデジタル化である。すでにデジタル化された資料も著作権の関係で海外からは閲覧できず、元の資料もILL対象外となり取り寄せることができないといった問題もある。これらをJLGやEAJRS(日本資料専門家欧州協会)の人的ネットワークを駆使して積極的に解決しようと尽力されている様子に接し、どれも簡単には解決できない問題ではあるが、海外での日本研究活動を衰退させないためにも、個人、組織、国レベルでの積極的な協力と援助が必要だと痛感した。個人的にも今回出会った方々とのネットワークを大切に、できることを確実に進めていけたらと思う。

6 おわりに

様々な図書館とそのサービスを直接見ることができただけでなく、外から自身の業務や日本の図書館の状況を見る機会ができたこと、公私ともに多くの方々との貴重な出会いがあったことは掛け替えのない経験であった。この経験を何らかの形で今後の業務に反映していきたい。特に、学習支援についてはいかに学部、研究科との繋がりを持つかが鍵だと感じている。また論文執筆、出版サポート、オープンサイエンスへの対応などの研究支援への積極的な関わりは、大学図書館ではどこでも話題になっている事柄であった。スウェーデンでは、スウェーデン語で発表される研究成果の可視性を上げる必要性を感じているというところが日本と共通しているという新たな気づきもあった。

また、今回北欧を訪れて印象に残ったのは、ワークライフバランス先進国スウェーデンの職場環境と子育て中の女性の活躍、公共図書館の美しさと多言

語の資料の多さである。週の就業時間が決まってい
て残業は基本的にはなく、勤務時間は融通が効くところ
があるようで、余裕をもって子育てしながら活躍して
いる女性が多く、子どもを持つ働く女性として羨ましく
思った。また、ストックホルムとマルメの市立図書館は
観光スポットになっているほどの美しさ、そして日本語
の小説や漫画をはじめとして各種言語の資料があること
への驚きがあった。これはスウェーデンの図書館政策の
成せる技らしい。

最後に、今回の研修のコーディネーターをしてくだ
さったりサ・セインズベリー図書館の平野さん、温かく
迎え入れて頂いたセインズベリー日本藝術研究所の
皆様、忙しい業務の中、受入れて下さった各図書館の
司書の皆様、事前研修や手続きをお手伝いいただいた
メディアセンター本部の皆様、そして洋雑誌の契約更
改作業終盤から年度末に向かうという1年で一番忙
しい時期に送り出してくれた日吉メディアセンター
スタッフ、特にテクニカルサービス担当の皆様がこの
場を借りて深く感謝したい。そして許されるならば
3ヶ月の主婦の不在を許してくれた家族（男子4名）
にもお礼を言いたい。

注

- 1) "Announcing the Jisc National Bibliographic Knowledgebase"
Copac Collection Management Tools.
<http://blog.ccm.copac.jisc.ac.uk/2017/02/03/announcing-the-jisc-national-bibliographic-knowledgebase/>
(参照 2017-10-10).
- 2) 1177 Vårdguiden.
<https://www.1177.se>. (参照 2017-09-05).
- 3) "Sjukhusbiblioteket Malmö"
<https://vard.skane.se/skanes-universitetssjukhus-sus/ditt-besok-hos-oss/sjukhusbibliotek/sjukhusbiblioteket-malmo/>. (参照 2017-09-05).

参考文献

- 1) "39 スウェーデンの教育の特徴" スウェーデンを知るための60章. 村井誠人編著. 東京, 明石書店, 2009, p.256-261. (エリア・スタディーズ, 75)
- 2) "第4章 英国の大学" 英国の教育. 日英教育学会編. 東京, 東信堂, 2017, p.142-143.
- 3) 菊池佑. "第六章 スウェーデンの病院図書室" 患者と図書館. 菅原勲, 菊池佑編. 仙台, 明窓社, 1983, p.169-211.
- 4) フォン・オイラーシェルピン三根子. "6章 図書館行政" スウェーデンの社会. 岡沢憲美, 奥島孝康編. 東京, 早稲田大学出版部, 1994, p.125-130, (Waseda libri mundi, 12).
- 5) 中本毅. "Ⅲ スウェーデンの保健・医療制度" 北欧の医療と福祉. 京都, かがわ出版, 1993, p.92-106.